

1 . からだは健康になりたがっている

からだはバランスを崩したとき、自然の状態に戻ろうとする。
健康な状態に戻ろうとするその勢いは人為的に活かすことが可能。

2 . 治癒は自然の力である

自然治癒力(ヒポクラテス)。

3 . からだは1つの全体であり、 すべての部分はひとつにつながっている

統合機能システムとしての人体。部分の変化が全体に影響を及ぼす。
ひざは足関節・股関節の両関節に対する補整関節。

4 . こころとからだは分離できない

5 . 治療家の信念が患者の治癒力に大きく影響する

自分の治療する患者がきっと良くなると信じる

Weil A : Spontaneous Healing, 1995(上野圭一訳:癒す心、治る力、p64,角川書店、東京、1995)

怨霊の力はすばらしい

011-029

(梅原猛:朝日新聞2004年8月24日、12版31頁)

柳田國男:個人にして神になるには、

1. 卓越した能力を持つ、 2. 余執が残る形で死ぬ(怨霊)

ex) 聖徳太子 = 卓越した能力・子孫の惨殺と一家の断絶

柿本人麻呂 = 歌の名人・流罪者/刑死者

菅原道真 = 学問に卓越・えん罪で太宰府に流罪/死後怨霊

怨霊を志願した千利休

利休の美意識は侘びさびを重んじる。秀吉は室内全体に金箔

「利休めはとかく果報乃ものそかし

菅丞相(かんしょうじょう = 菅原道真)になるとおもへ八」(死の前の狂歌)

豊臣氏は秀吉の死後17年にして滅びた

利休の子孫であると3千家は今もなお栄えている

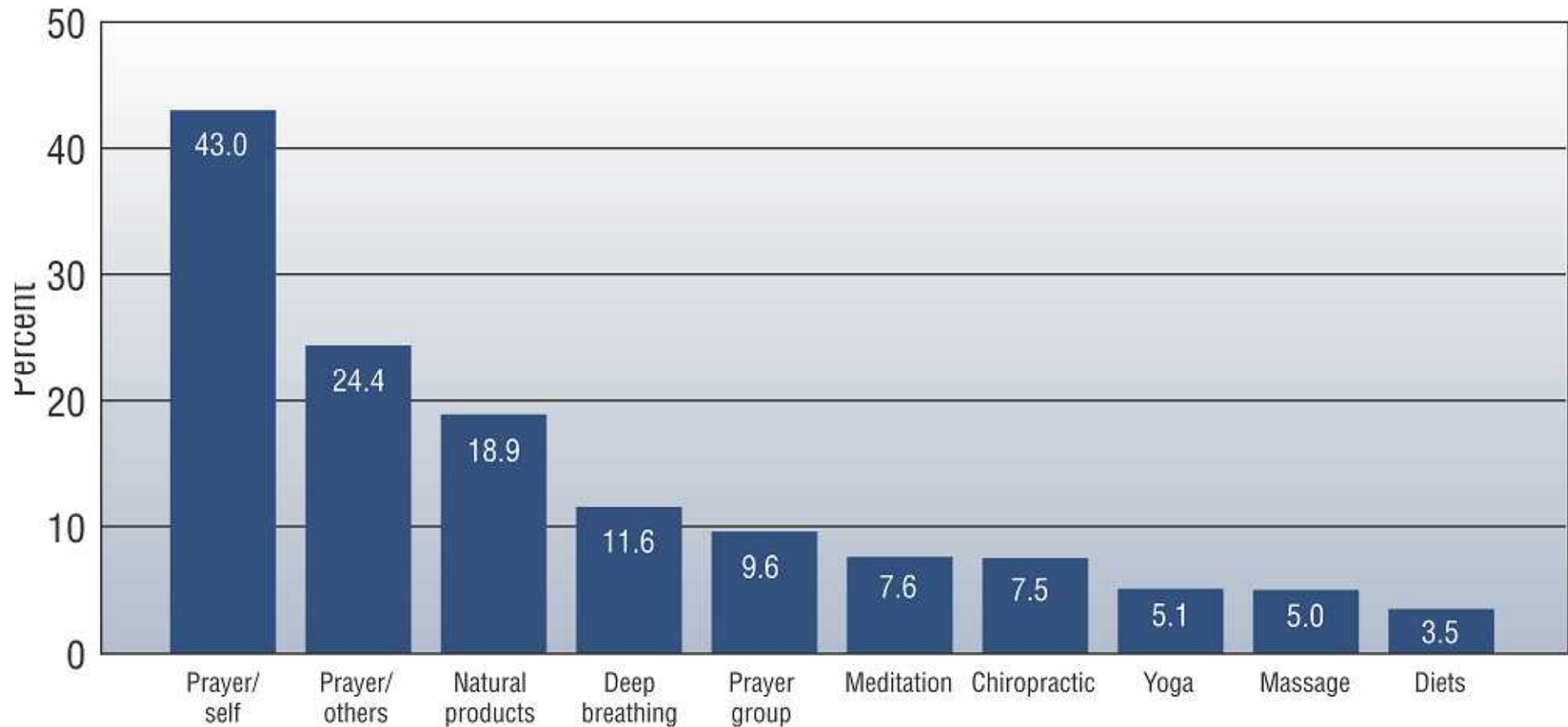
怨霊の力は素晴らしい

恨み・辛み・妬み・嫉み。。。は、嬉しい・楽しい・褒める。。。より、

エネルギーが大きい(阿岸鉄三)

10 Most Common CAM Therapies—2002

011-030



Source: Barnes P, Powell-Griner E, McFann K, Nahin R. CDC Advance Data Report #343. Complementary and Alternative Medicine Use Among Adults: United States, 2002. May 27, 2004

011-050 現代日本医療の霊性・宗教性の重層性

現代日本の医療と霊性・宗教性

表層(後天的・獲得的・教養的・建前論的):

医療・教育において霊性・宗教性は禁句！オカルトには腰が引ける(どうする?)

。

儒教道徳・精神の追放(paternalism追放)。

情報開示・informed consent・病名告知。移植医療。国境なき医師団・在宅看護

深層(先天的・生来的・遺伝的・民俗的):

霊性・宗教性を認める。死体に靈魂。葬式・盆・暮れ・祭り(日本式儒教化仏教)

マスコミ的オカルト・占い・祟り・遺恨・怨恨。

儒教的精神(家族内のことは外へ言いたくない。家の恥。外聞が悪い)

病名は本人には言わないで！キリスト教的service/donation精神は未熟・ない？

移植臓器は肉親へ提供。移植のための脳死(日本的擦れ・歪み)。

医療における感性の原初的共鳴(vibrational medicine)・癒しの医療

神仏に祈願/加護・シャーマニズム

cf:most popular CAM in USA prayer

根源的深層精神構造は、霊・霊性を認め、真にグローバル的共通！！

011-051

外来宗教文化に過剰反応、だが消化不良

外来宗教・文化に過剰反応し、宗教論議・宗教闘争の成果なしに、
政治的に宗教改革するのは日本文化の特徴

大和朝廷時代の仏教伝来にも八百万多神教(山岳神道)の弱体化

→神道・仏教の習合、慈悲の心 cf:薬師・薬師寺・施療院(寺)、神仏に祈願

江戸時代に儒教流布、封建制度の維持に好都合

→神道・仏教・儒教の習合・日本的仏教 cf:赤ひげ医道・paternalism

江戸末期からの西欧キリスト教文化伝来に廃仏毀釈

明治政府の近代帝国化・国家神道の擁立

天皇(=現人神)と天照大神ら(=現人神のご先祖)に対する信仰 cf:儒教精神
教育勅語(=現人神への信仰をもとに儒教道徳に近代道徳を加えたものの羅列)

cf:日本赤十字社・恩賜財団済生会・掖済会

第二次大戦の敗戦によって国家神道も否定(=現人神が人間宣言)

GHQは、国家神道は否定しても宗教(とくにキリスト教)は否定しなかった!?

共産党の伸張は宗教そのものを否定?

→過剰反応として医療・教育における霊性・宗教性は禁句!! 宗教的習俗衰退

儒教道徳の追放→社会規範・公德・公序良俗の喪失

祭りは宗教性のないエンターテインメント・イベントとして復活

霊性・宗教性を認めるキリスト教文化・精神消化しきれない

精神の字義

靈性と精神の区別をしなければならない。
精神は心・魂・物の中核ということである。
日本精神などという時の精神は、理念または理想、
また倫理性を持っている。
精神的などを言うときには、物質的なるものと対蹠的立場
にあるが、必ずしも宗教性を持ってとは限らぬ。
精神が話されるところ、必ず物質と何らかの形態で
対抗の勢いを示す。

靈性の意義

靈性を宗教意識と書いてよい。。。

靈性に目覚めることによって初めて宗教がわかる。

普通に精神と言っている働きとは違う。

精神には倫理性があるが、靈性にはそれを超越している。

精神は分別意識を基礎としているが、

靈性は無分別智である。

靈性の直感力は、精神の直感力よりも高次元のもの。。。

癒しの心は根源的宗教心

癒しを求めるのは、

ヒトのDNAに記録された森の自然生活への回帰希求

。

自然生活は、アニマ・八百万の神の存在する環境
精霊・多神教信仰

神は癒し給う（パレ） 自然治癒（カ）

ヒトは、時代・地域を越えて神に祈る

cf: 四国・熊野行脚、top CAM in 2002 USA

願わくば（神に？）

原初的神信仰による安らかな生活を送ることの出来る世界平和実現へ。現実的には、次（低？）次元の宗教・文明の衝突で絶えない戦争・民族紛争

癒しの原体験は森で

例えば...

炎（リゾートの松明の炎・キャンプファイヤー・火祭り）

ヒトは炎が大好き。炎を見ると、ほのぼのとした安心感。

明るさ・温かさでは電気機器が勝るのに...

原体験：ヒトは40数万年間、森に棲んだ身体的に弱い動物。

猛獣から身を守るには火が効果的。火があると安心

。

森を渡る風の音：森にいる感覚 音楽療法

川のせせらぎ：水の存在 音楽療法

花の香り：野山の感覚 アロマセラピー

他のヒトとの皮膚接触：群れにいることの確証・仲間感

指圧・マッサージ・満足

sexual healing（本の題名）：

生殖目的には本来癒し感覚は不要？！あった方がよい？！

仲間感・存在を認め合う、だけど雌雄で求めるものが異なる

癒しを求めるのは古代回帰希求

ヒトは40数万年間森の中で群れをつくって棲息：

植物収集・動物狩猟・護身に有利。

数千年前から次第に森を離れ：

植物栽培・動物飼育・小屋/家に住む

数百年前から社会的分業化：

植物栽培・動物飼育もしないヒトが増加

数十年前からコンクリートに囲まれた生活：

DNA記録では、40数万年間の森の記憶が圧倒的に多量

DNA記録ー当代実生活間のdilemma

精神的には癒しを求め、肉体的には生活習慣（急変）病

文明社会に著明な医療の重層

反論的疑問：当代、森に住むヒトは癒しを求めているか？

所詮、ヒトは、根源的に煩惱・追求・欲望する存在？

→原初的霊・宗教的体験・環境を求める

霊性と文化の発展

霊性は民族がある程度の文化段階に進まぬと
覚醒せられぬ。

日本民族についても今日の日本民族の一人びとりが
みな霊性に目覚めていて、正しき了解者だというわけ
にはいかない。

霊性の覚醒は個人的経験で、最も具体性に富んだ
ものである。

宗教というものから見ると、それは人間の精神が
その靈性を認得する経験である。 . . .
宗教意識は靈性の経験である。

日本的靈性

精神活動の諸事象の上に現れる様式には、各民族に相違するものがある。

靈性の日本的なるものとは何か。

自分の考えでは、浄土系思想と禅とが、最も純粹な形でそれであると言いたい。。自分は仏教を外来の宗教だとは考えない。禅も浄土系も、外来性を持っていない。仏教は渡来したというが、渡来したのは仏教的儀礼とその付屬物であった。．．神道各派が、日本的靈性を伝えていると考えてもよかるうが、神道にはまだ日本的靈性なるものがその純粹性を顕していない。神社神道または古神道などと唱えられているものは日本民族の原始的習俗の固定化したもので、靈性には触れていない。

WHO憲章改定考察への要求

1998年1月22日WHO憲章のレビュー：特別委員会報告

以下を挿入する

「健康とは、完全な肉体的、精神的、**spiritual**および社会的福祉のdynamicな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない

Health is a dynamic state of complete physical, mental, **spiritual** and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity」

(津谷喜一郎ら：、健康のスピリチュアル・ディメンジョン(5)、東洋医学28(3):234,2000)

Constitution of the WHO

Constitution of the World Health Organization :

THE STATES parties to this Constitution declare, in conformity with the Charter of the United Nations, that the following principles are basic to the happiness, harmonious relations and security of all peoples:

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

The enjoyment of the highest attainable standard of health is one of the fundamental rights of every human being without distinction of race, religion, political belief, economic or social conditions.

私見：霊性・宗教性（心）

特定の世俗的宗教・教派などに対する偏執的心的状態をも含むが、さらにもっと根源的で拡大されたものを意味し、自然界の事象、ことに生命現象などについて考えるときに、現代科学では理解・説明できず、造物主の存在・意思に気づき畏怖・敬愛の念をもつ心的態度、あるいはそのような心象の存在を認知・容認する心的態度

癒しは医療の原点

癒し:

本来、自発的・自動的
科学を超えた生命現象で造物主の行為
造物主を思考する心的態度は霊性的・宗教的

代替・相補・伝統医療:

癒し能力を活性化
癒しを促進する具体的・実際的技術(わざ)を提供

癒しは、医療の原点

なぜ、「現代の癒し」が求められるのか？

お互いに求め合うのが愛情行為：双方通行的

真の癒し：自動・自発的。神から一方通行。類愛情行為

宗教心：自動・自発的。神へ一方通行的。類愛情行為

現代は、真の愛情不在時代

継続には精神的・肉体的にお互いの妥協・受容・努力・忍耐が必要

→移ろいやすく、うっとうしい、うざい、煩わしい

「現代のcommercialized 癒し」：

ヒトの他動的行為pseudo-healing、healingoid

選択肢が多種・多様・多彩。お金を払えば、簡単に手に入る

cf: マッサージ・リフレクソロジー：擬似愛撫

外食：擬似団欒体験共有 週末のコンビニ：人恋しくて集まる

自分のための癒しの石鹸・ブランドものプレゼント

携帯ゲーム機：癒しの男バージョン/女性疑似体験/生の女性は扱いが大変

携帯電話：直接会わなくてすむ接触

意識の表層：関わりたくない 深層：人とつながっていたい

ホモサピエンス

<人間(ホモ)>が<知慧(サピエンス)>であるのは、人間が<物を作る(ファール)>からであると主張し、人間の生物学上の他の霊長類との相違は、道具を作ることとの関係で最もよく理解されると主張する自然人類学者の学派は、疑いもなく刺激的な命題を誇張している。<人間(ホモ)>はまた<遊ぶもの(ルデンス)>でもあるし、<祈るもの(オランス)>でもあるし、その他多くのものでもある。

(White L: Machina ex deo, 1968 (青木靖三訳: 機械と神, 0134, みすず書房, 東京, 1999年))

人間の本質は、 homo patiens/homo curans

015-040

人間は古来、「理性的存在 (homo sapiens)」と規定されてきた。近代医学はこうした人間観に立脚して、医学を科学とみなし、さらには技術と考えてきた。この人間観には心身分離が前提されており、そこにあるのは身体の技術的支配という思想である。しかし、人間は心身の合成体であって、「感性的存在 (homo patiens)」であるということが帰結する。人間とは苦しみ悩む存在である。自らの脆弱性を他者に助けられ護られながら、他者の脆弱性を助け護ってゆく (助け護る人 homo curans) ことによって、人間は人間として生きてゆくことができる。

(池辺 龍雄：医学を哲学する、p144、世界思想社、1996)

「思いやり」は、治療の原動力

015-042

診察は、患者の苦しみをわが身の苦しみと感得するような感性を基礎にしてはじめて成立する。

治療は思いやりの感情の具体的展開である。

診察や治療の基礎にあってそれらの原動力となるものが、共感という感性であり、思いやりという感情である。

ここでは、医者と患者の間には、真の意味での人格関係がある。

患者の苦しみに対する共感および思いやりは、とりもなおさず倫理的感性であり倫理的感情である。

医療と宗教

015-046

科学を持たない人間社会は過去にいくつも見られるが、宗教を持たない人間社会がかって存在したためしはない。

そして、医療は宗教とつねに不可分離の形で存在した。医療の宗教からの絶縁は、西洋近世における近代科学の確立に伴って生じた科学としての医学の誕生とともに始まる。

(池辺義教：医学を哲学する、p85、世界思想社、1996)

CAM AT THE NIH

FOCUS ON COMPLEMENTARY AND ALTERNATIVE MEDICINE

VOLUME XII, NUMBER 1

WINTER 2005

Prayer and Spirituality in Health: Ancient Practices, Modern Science



© Duncan Walker

People have used prayer and other spiritual practices for their own and others' health concerns for thousands of years. Scientific investigation of these practices has begun quite recently, however, to better understand whether they work; if so, how; and for what diseases/conditions and populations. The

- Almost 10 percent had participated in a prayer group for their health.

Prayer was the therapy most commonly used among all the CAM therapies included in the survey. The report also addressed the use of other CAM approaches that can have a spiritual component, including meditation, yoga, tai chi, qi gong, and Reiki.

INSIDE

- 3 NCCAM's New Strategic Plan
- 4 Research Roundup
- 5 Herb-Drug Interactions
- 6 News for Researchers
- 6 Acupuncture for Knee Osteoarthritis
- 7 Melatonin Report
- 7 Calendar of Events
- 8 Institute of Medicine's CAM Report

NATIONAL CENTER
FOR COMPLEMENTARY AND
ALTERNATIVE MEDICINE

NATIONAL INSTITUTES
OF HEALTH

U.S. DEPARTMENT OF
HEALTH AND HUMAN
SERVICES

© Dur



...so, how, and for what diseases/
conditions and populations. The

National Center for Complementary and Alternative Medicine (NCCAM) is supporting research in this arena.

Many Americans are using prayer and other spiritual practices. This was confirmed by findings from the largest and most comprehensive survey to date on Americans' use of complementary and alternative medicine (see Barnes PM et al. in "Sources"). This survey of more than 31,000 adults, released in May 2004 by the National Center for Health Statistics and NCCAM, found that 36 percent had used complementary and alternative medicine (CAM), when prayer was not included in the definition of CAM; when prayer was included in the definition of CAM, 62 percent had used CAM (all figures refer to use in the preceding 12 months). Among the respondents:

- 45 percent had used prayer for health reasons.
- 43 percent had prayed for their own health.
- Almost 25 percent had had others pray for them.

meditation, yoga, tai chi, qi gong, and Reiki.¹

Stephen E. Straus, M.D., Director of NCCAM, said, "Prayer and spirituality for the benefit of health are relied upon by many Americans. NCCAM seeks to develop strategies to bring the most rigorous and detailed scientific approaches to studying these and other CAM practices so that we can understand the health impact that these practices might have."

Catherine Stoney, Ph.D., a Program Officer in NCCAM's Division of Extramural Research and Training, oversees many grants in NCCAM's mind-body portfolio (see pg. 2). She noted: "There is already some preliminary evidence for a connection between prayer and related practices and health outcomes. For example, we've seen some evidence that religious affiliation and religious practices are associated with health and mortality—in other words, with better health and longer life. Such connections may involve immune function,

(continued on page 2)

¹ For definitions or other information on these or any other CAM therapies, contact the NCCAM Clearinghouse (see pg. 2).

医療の統合へのincentive/driving forceはなにか？

人類の誕生とともに発生した原初的医療は、多要素的（宗教的・芸術的・哲学的・技術的など）であった。近代西欧科学の成立後、科学的に理解できる（＝数学的に表現できる）部分のみを削り取り、科学的学理・学説でback-upしたのが“科学的医学・医療”の体系である。結果的に、科学的に理解できない要素は、明解な科学的学理・学説がなく、“非科学的医療”となった。

cf. 医療類似行為・医業類似行為

医療の統合は、本源性医療への回帰志向

→多要素性・全人性の追求

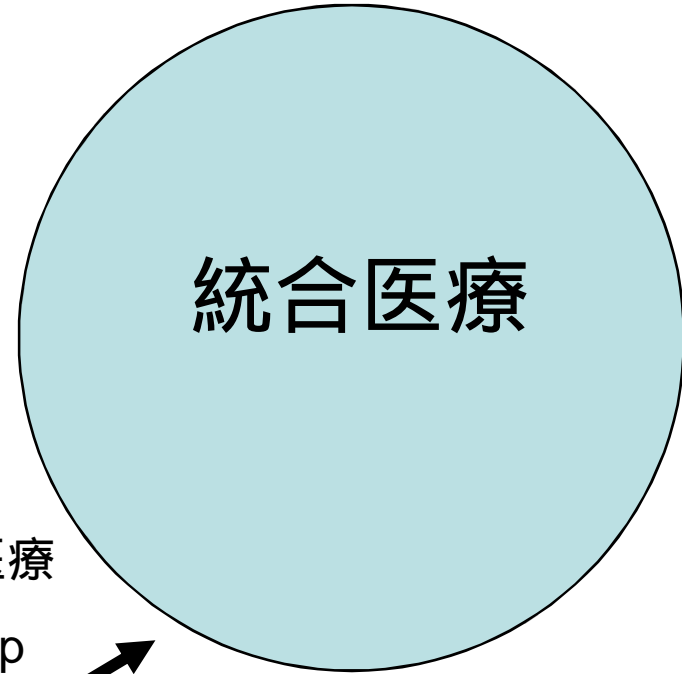
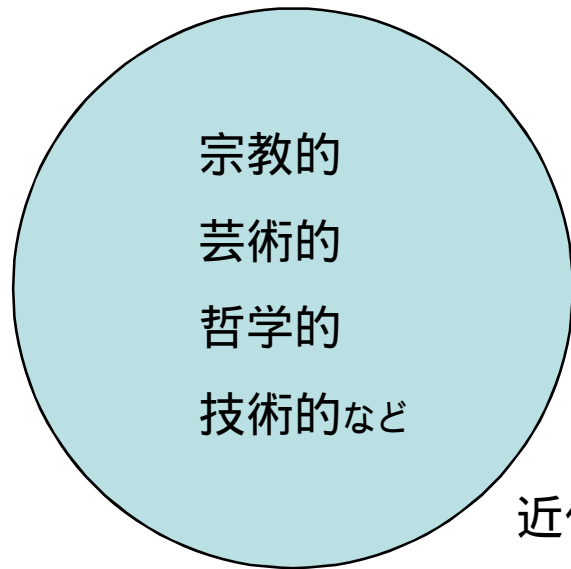
（阿岸鉄三：2005年）

016 - 014

医療の統合へのincentive/driving force

原初的医療(多要素的)

本源的医療



cf. 科学的理解は、時代により異なる。医療奇跡は、通常医療に

近代科学に依拠する医学・医療

科学的理念・学理でback-up

ルネッサンス



20世紀末

共通感覚論

共通感覚を奪われた人間とは、まことに、論理的に考えることのできる動物以上のものではない(H. アーレント)。

青年たちは、なによりもセンスス・コミュニスのうちで教育されるべきである(ウィーコ)。

五感の形成は、現在に至るまでの全世界史の一つの労作である(マルクス)。

共通感覚とは、**他のすべての人々のことを顧慮し、他者の立場に自己を置く能力**である(カント)。

音楽を聴いても、いろいろの音が耳の中に入り込んでくるだけで、何の意味もないんです(離人神経症者)

(019 - 037)

東洋と西洋における宗教と科学

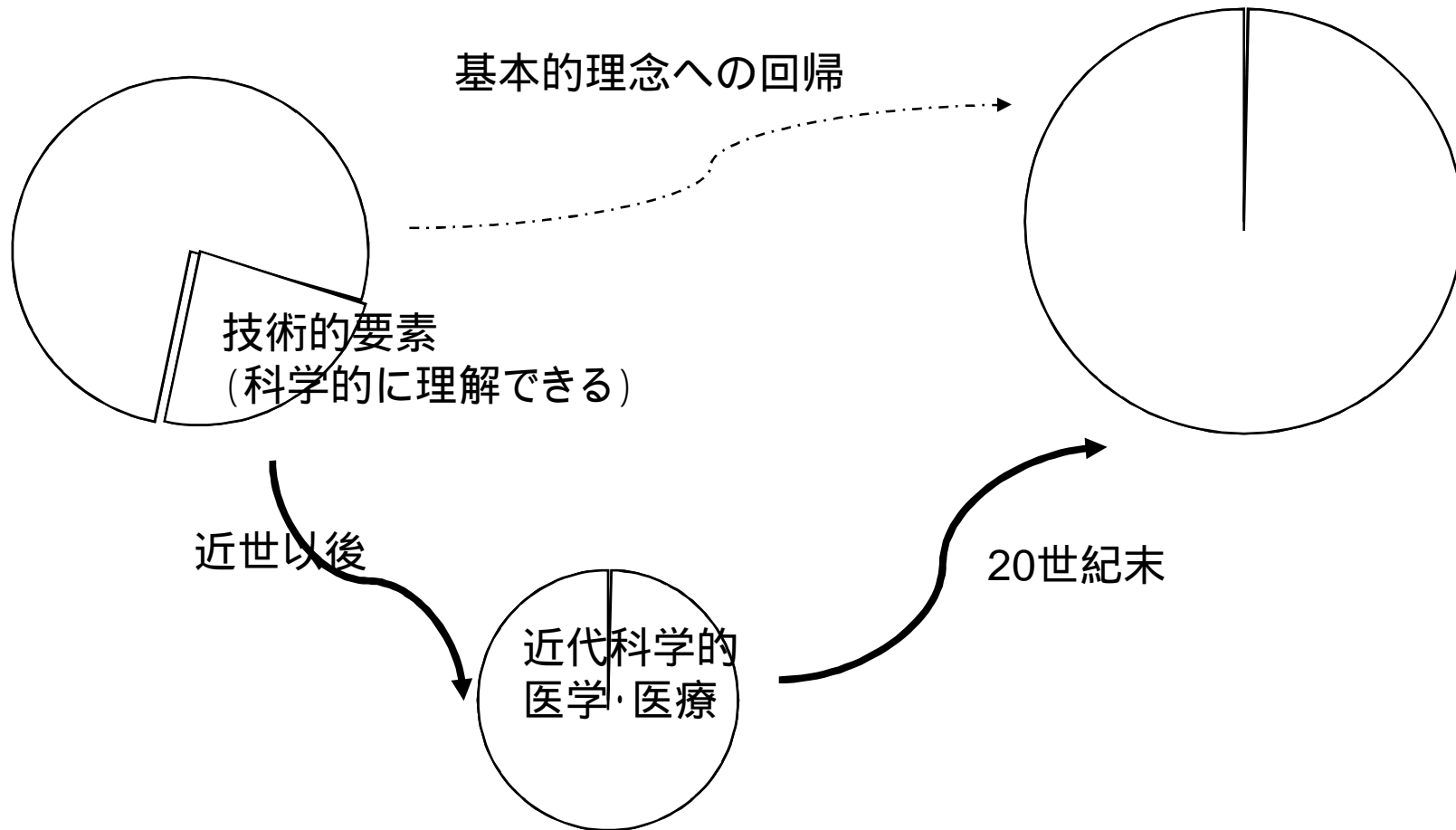
ニューエイジ運動は新宗教を運動と隣接し。。。そこでは、**宗教と科学の融合・調和**といったテーマが数多く見受けられる。西洋では科学と宗教は、歴史的にはっきりと区別されてきたし、天動説と地動説の話に代表されるように、時には激しい対立の時代もあった。しかし、東洋宗教においては、取り立てるほどの激しい対立の歴史はなく、むしろその原理は一致するという考え方の方が、広く受け入れられてきた。**東洋宗教の原理を取り入れたニューエイジ運動において、科学との対比における宗教の境界線があいまい**になっていくのは必然的。。。

(井上順孝: 若者と現代宗教。p164、ちくま新書226、筑摩書房、東京、1999年)

(019-066) 科学專一的医療から
統合医療へ移行のincentive/driving force

原初的医療
多様な側面
多彩な要素

統合医療
全人的医療



プラシーボは癒しのシンボル

001-015

プラシーボ効果とは、シンボルを用いた儀式がもたらす癒しの効果である。

世界中の様々な宗教や信仰の中でおこなわれている癒しの儀式と本質的になんら変わるものではない

。

(廣瀬弘忠：心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p36,朝日新聞社、東京、2001年)

プラシーボ効果を発揮する要因 002016

医者と患者の間の信頼にもとづいた人間関係

医者が治療にかける自信や威信のような

人間的要素

病院の雰囲気のような状況的要因

患者の心の柔軟さがプラシーボに

働く場を与える

cf. プラシーボはエンドルフィンを分泌

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p39,朝日新聞社、東京、2001年)

プラシーボにはある種の神秘性が必要 002017

ただ何かを期待しているだけの人に比べて、**心底それを信じている人の方が**、より強い即効的な内的反応、あるいは生理的反応を起こしやすいのは確か。。。これから起ころうとしていることを思い描いて、頭の中に詳細な認知地図をもっているような人々ではない。。。。

もし、医者が、このプラシーボの作用をきわめて具体的、かつ正確に伝えたとしたら、ある意味で、プラシーボの与え手に必要な強力で効果的な**カリスマ性を失ってしまう**。。。。

(Harrington A(ed):The Placebo Effect.An Interdisciplinary Exploration,Harvard University Press,1997)

医学的なプラシーボという言葉

002019

「医術のごくありきたりの方法

(commonplace method of medicine)」と定義

(1787年イギリスで出版されたクインシーの辞典)

「患者への治療効果よりも、ただ患者を心理的に

落ち着かせるための薬」と定義

(1811年出版されたフーバーの医学事典)

「偽薬」(1947年出版アメリカ図解医学事典21版、Dorland)

「臨床試験における不活性薬」(1950年代)

「科学的な実証にもとづいたプラシーボ効果の再発見

= 病気を治療したり心理的ストレスを解放する効果」

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p61,朝日新聞社、東京、2001年)

プラシーボ効果は、心身機能

002021

プラシーボ効果とは、人類が長い時間をかけて体得してきた、生き残りのための心身機能の一つである。

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p71,朝日新聞社、東京、2001年)

プラシーボ効果発現の説明

002023

Endorphin経路

免疫力活性化経路

cf. 遺伝子switch-on(阿岸)

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p131,朝日新聞社、東京、2001年)

脳の情動処理

002024

脳は「できる」と確信する(仮説を立てる)と、その「確信」の論理的な後ろ盾を与えるべく認知情報処理系がフル活動をする。そのため「できる」と確信したことは必ずできるようになる。逆に「できない」と確信してしまうと、脳は「できない」ことの論理的理由を明らかにするように働き、できる可能性をどんどん縮小する方向に働く。

cf. 情動による遺伝子switch-on(阿岸)

(松本元: 愛は脳を活性化する。岩波書店、東京、1996)

「言葉は、もともと魔術でした。言葉は、今日でもむかしの魔力をまだ十分に保存しています。われわれは、言葉の力によって他人をよろこばせることもできれば、また、絶望におとしいれることもできるのです。。。言葉によって。。。知識を伝達。。。判断や決意を左右する。。。言葉は感動を呼び起こし、人間がたがいに影響し合うための一般的な手段なのです。(フロイト:「精神分析入門」、懸田ら訳、人文書院、1971年)」

精神分析にとって、言葉は全宇宙である。フロイトは、魔術的な言葉というプラシーボを用いて治療したのだ。

cf. 情動による遺伝子switch-on (阿岸)

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p162,朝日新聞社、東京、2001年)

心理療法が効果を表す3つの要因

002032

心理療法の効果の比較研究結果：

- 1.心理療法には効果がある。
- 2.異なる心理療法間には、明確な効果の違いはない。

心理療法が効果を表すために満たすべき3つの要因：

- 1.もっとも必要なのは、治療者と患者の間に生まれる信頼にもとづいた相互関係。
- 2.治療者の人間的な温かさ、共感能力、忍耐心、率直さ、誠実さなどの人格的資質。
- 3.患者からすると、治療者への強い信頼、治療効果への期待、自分自身を変えようという意欲、忍耐力など。

(廣瀬弘忠：心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p171,朝日新聞社、東京、2001年)

1. 精神的な安定が得られるので、
 ストレスを受けにくくなる。
2. 心を分かち合う、信仰を同じくする人々からの
 物心両面にわたる支援を受けることができる。
3. 良い生活習慣が身につくため、危険な性交渉、
 喫煙、飲酒、麻薬などのリスクを避けられる。

(Koenig HG: The Healing Power of Faith; Science Explores Medicine's Last Great Frontier, Simon & Schuster)

神秘体験は生理的反応である

002034

「神秘体験」には、プラシーボ効果と相同の現象があらわれているのではないか。

古今の**宗教上の奇跡**は、病気の治癒や障害からの回復などを、神仏・聖人の霊力により近代科学的な医療をおこなうことなく成し遂げる特徴をもつ。そこに働く力を説明するには、必ずしも超常的な力を前提とする必要はない。奇跡は、わたしたちの脳が可能にする**生理的な変化**と捉える方がより自然。。。それは宗教がもたらす**プラシーボ効果的な変化**ではないか。。。

(廣瀬弘忠:心の潜在力、プラシーボ効果。朝日選書679,p171,朝日新聞社、東京、2001年)

「祈り」の効果なし？

心臓手術、米で1800人研究

最古の医療とも言われる「祈り」は、病気の治癒に効果があるのか。患者を

知らない人に祈ってもらった。効果は確認されなかった」とする声明を発表した。

では、効果は確認されなかったという。手術の成功については、祈りの効果は

知らぬ間に祈ってもらった心臓手術の結果への影響を調べる研究が、米国で手術を受けた約1800人を対象に実施された。

同種の研究としては6回目、過去の研究からは第三者の祈りが治癒に効果を与える可能性が指摘されていたという。

AP通信によると、祈りとは関係ないボランティアが「手術が成功して早く回復し、合併症が起きない」よう祈ったという。手術の成功については、祈りの効果は

ジョン・テンプレート財団（本部ペンシルベニア州）は「今回の厳格な研究

は患者とは関係ないボランティアが「手術が成功して早く回復し、合併

症が起きない」よう祈ったという。手術の成功については、祈りの効果は

（ニューヨーク）

(022 - 002)

「祈り」の効果なし？

(朝日新聞2006年4月1日14版7頁)

最古の医療。。。「祈り」は、病気治癒に効果があるのか。
患者とは関係ないボランティア(約1,800人)が「手術が成功して早く回復し、合併症が起きない」よう祈った。。。
手術の成功については、祈りの効果は見られなかった。
祈りが行われていることを知っていた患者の59%が30日以内に合併症 vs 知らなかった患者は52% (マイナス効果)。

ref:患者に関係ないボランティアは想定外

ref:CAMとしての「祈り」は、祈る人の心の問題、
祈られる人への効果は期待外？

日本の「宗教」と倫理

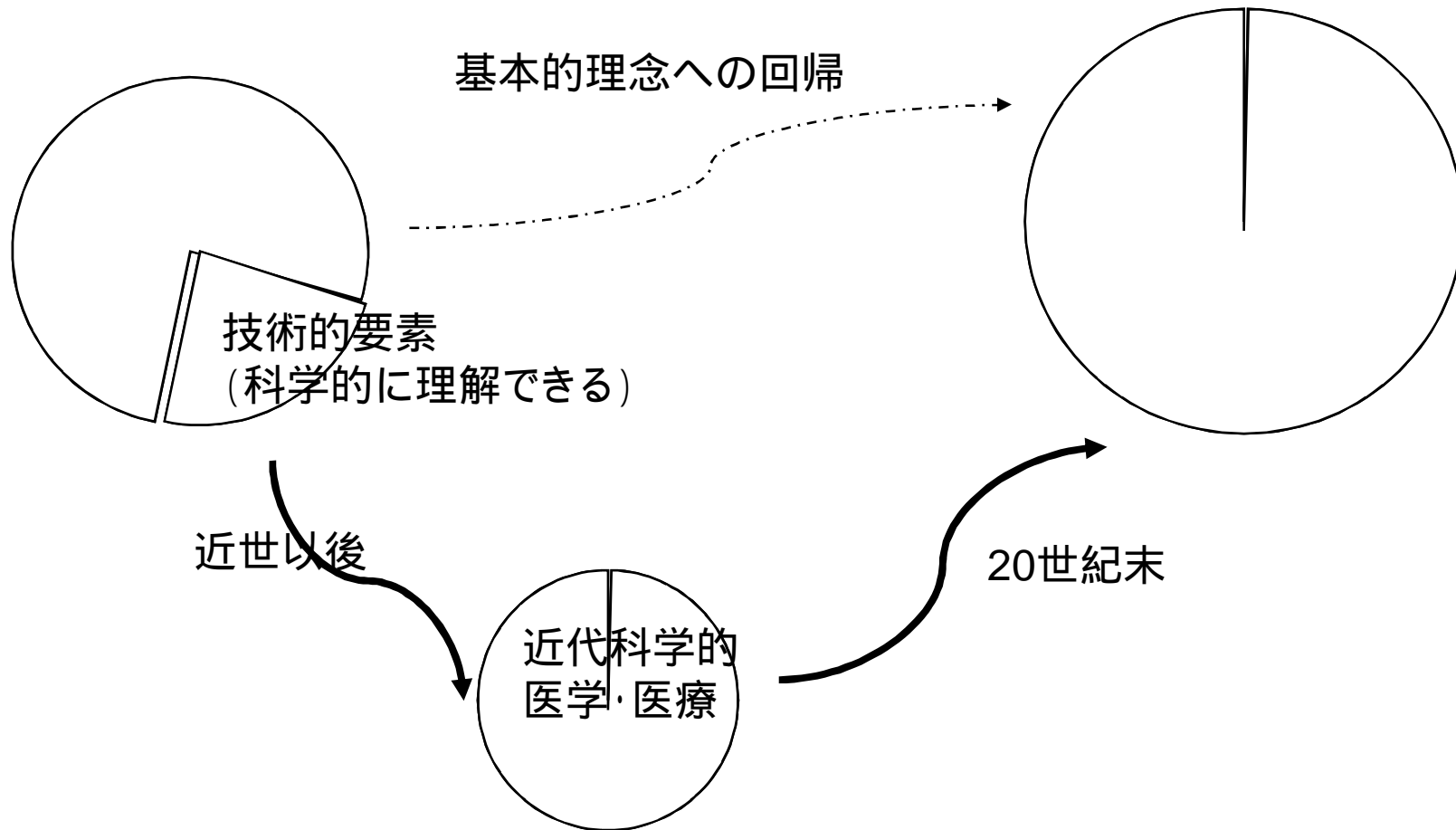
日本では、ユダヤ・キリスト・イスラム教などの「宗教」に相当する歴史的代替物として、共同体による生活倫理。。。「ムラ(イエ)の掟」「ムラ(イエ)の倫理」。。。日本社会では生物学的血縁の連続に宗教的価値はなく、儒教を宗教として、つまり生活原理として受容したことはない。いわば教養として受け入れられただけ。。。人格生成のプロセスは、生活共同体が妊娠・出産・生育をめぐって行ってきた習俗 = 通過儀礼によって支えられ。。。生後3年くらいまでの間に続く儀礼を経て初めて人と認められ。。。

出生前の胎児やそれ以前の胚に人格を求める意識はなかった。

(022-020) 科学專一的医療から
統合医療へ移行のincentive/driving force

原初的医療
多様な側面
多彩な要素

統合医療
全人的医療



(フランスの外科医 アンブロアズ・パレ (1510?-90))

(023 - 008)

"私が処置をし、神がこれを癒し給うた。"

治癒: 自発的・自動的

医療: 自発的治癒能を活性化

(026 - 002) ヒーラーは霊的存在の仲介者

治療師(ヒーラー)は治療エネルギーというか
生命力を伝える仲介者にすぎず、**霊的存在の
助け**を受けていることが分かったのである。

(Shine B : Mind to Mind,1989

(中村正明訳:スピリチュアル・ヒーリング、p170、日本教文社、東京、1991))

(026 - 004)

自分の中に治す力

だれでも**自分の中に治す力**を秘めているのであり、それが活発になるよう手を貸すのが治療師(ヒーラー)なのだ。「健康を保つのに一番必要なのは人生に対して肯定的な態度をとることである。**否定的な態度とストレスがほとんどの病気の根底にある**」

(Shine B : Mind to Mind,1989

(中村正明訳:スピリチュアル・ヒーリング、p244、日本教文社、東京、1991))

(026-007)

自然宗教と創唱宗教

日本人の宗教心は、「融通」と「曖昧さ」に満ちている。。。

「特定の宗教」を基準にしている限り、とりわけキリスト教・イスラム教を念頭に置く限り、日本人の宗教心を正確に理解することはほとんど不可能。。。自然宗教と創唱宗教の区別が、日本人の宗教心を分析する上に有効。

自然宗教：

自然発生的

教祖・経典・教団を持たない

無意識に受け継がれ、今に続く

創唱宗教：

特定の人物が特定の教義を唱え、
信ずる人がいる

教祖・経典・教団によって成り立

キリスト教・仏教・イスラム教・

新興宗教など

Ref:日本人の古来の心情は、非宗教的spirituality？

(阿満利磨:日本人はなぜ無宗教なのか,ちくま新書085、p010、筑摩書房,東京,1996)

(026 - 008)

無宗教という名の宗教心

われわれが容易に「無宗教」を口にする原因の一つに、風俗や習慣となってしまった宗教は「宗教」ではないという思い込みがあるようだ。それは、宗教といえれば必ず教祖や教団がなければならないという思い込みと軌を一にしている現象といえよう。

ref:非宗教的spirituality

ref:明治政府の廃仏毀釈。隠れ仏教徒？

ref:明治政府の神道非宗教論。

(阿満利磨:日本人はなぜ無宗教なのか,ちくま新書085、p017、筑摩書房,東京,1996)

(026-012)

「宗教」という造語の陰に

現在の日本人が使う意味の「宗教」は、キリシタンの取り扱いをめぐって生まれた明治になってからの翻訳語。。。キリシタンは、維新政府になってからも、徳川幕府と同じく禁制の対象。キリシタンが天皇の神聖を危うくするかもしれない。。。列強諸国との外交を確立しようとするときキリシタン禁止令が大きな障害になる。明治政府は、禁制の高札を撤去してキリスト教の信仰・普及が自由になったかのように外国には説明し、一方国内的にはキリシタン禁制は周知のことで、あえて高札を立てておくにも及ばない。。。ここに、「宗教」の用語が登場・定着。。。この「宗教」が「創唱宗教」を意味して、「自然宗教」を含む言葉ではなかった。。。日本人の多くが「創唱宗教」の信者ではないという意味で「無宗教」と称する理由。。。。

(阿満利磨:日本人はなぜ無宗教なのか,ちくま新書085、p074、筑摩書房,東京,1996)

(026-013)

さまざまな「神道非宗教論」

天皇を絶対視する神道を、「信教の自由」の見地から直ちに国教化できないとすれば、その**神道を宗教とは見なさなければよい**のである。神道を国民に強制しても、「信教の自由」には一向に抵触しないことになる。神道とは本来祭の儀式のことであって、具体的には、天皇が祖先を祭り、人民のために功労があった臣下の靈魂を慰める道のことだ。。。

神道は、「朝憲」であり、「教憲」ではない。。。

(阿満利磨：日本人はなぜ無宗教なのか，ちくま新書085、p074、筑摩書房，東京，1996)

(026-014) 浄土真宗の「神道非宗教論」

明治維新は、天皇を絶対化する神道論によって理論武装し、祭政一致と神仏分離を、最も重要な政策。。。その路線に沿って痛手を受けた仏教集団が生き残るため、真宗の僧侶たちは、この路線を否定せずに、しかも「信教の自由」を認めて、さらに、**真宗**に固有の教義を維持していく方策を模索。。。そのために工夫された論理が**神道非宗教論**なのであった。

(阿満利磨：日本人はなぜ無宗教なのか，ちくま新書085、p074、筑摩書房，東京，1996)

(026 - 015)

日本人の宗教は雑多で曖昧

日本人の宗教が、「雑多」で「曖昧」になったのは、明治以後、「天皇崇拜」を中心とする「国家神道」が勢いを得てから。。。。「天皇崇拜」のシステム自身、天皇を頂点とする一神教的な、国教的な、体系と一貫性。。。しかし、その「天皇崇拜」のシステムが排除したり、破壊した領域に暮らす人々にとっては、従来の一貫した信仰生活がかえって分断され、戸惑いと「曖昧」「雑多」。。。。

(阿満利磨:日本人はなぜ無宗教なのか,ちくま新書085、p101、筑摩書房,東京,1996)

(026 - 018)

ラポール (rapport)

Freudの源流となったMessmerの動物磁気説の中での概念。精神科の医者の間では日常語として使っている言葉。。。言葉を使わないで患者と治療者の間で**気持ちを通じ合う**ような現象。Messmerの磁気・治療を受けにきた個人の磁気が、宇宙の磁気と感応しあって動物磁気の治療が成立すると考え、人から人への感応をラポールと呼んだ。。。。

ラポールは1つの感覚で、個人の感覚というより共通感覚に直接つながる二人で**共有する感覚**。。。。

ref:気が合う・気が通う ref:placebo効果

ref:政治家・役者・歌手の存在感、カリスマ性

ref:vibrational medicine

(026 - 019)

霊性と宗教性

今日、宗教的でないが非常に霊的な多くの人々と、特に霊的ではないが非常に宗教的な多くの人々がいる。**霊性と宗教性は同じものではない**ということ、また、**真正の霊性**は、組織宗教の壁の内側に見い出されようと外側に見い出されようと、**尊敬に値する**ということをわれわれの社会が認めるべき時が来ている、と私は信じる。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p7、星雲社、東京、2000年)

(026 - 021)

現代の宗教と靈性

今日、状況は一変した。人々は、もはや教会・寺院を彼らの人生の中心とみなしておらず、自分の魂の世話のために、司祭・牧師・あるいはラビに頼らない。ルネサンス中に芸術・科学は教会と手を切り、次の350年にわたって科学は西洋文化における最終的権威として確立され。。。中世の人々が教会を頼ったのとほぼ同じ仕方で**科学に頼る**ようになった。。。徐々に科学的言説がわれわれの心に浸透し、しばしば古い宗教的言説を侵食した。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998)

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p15、星雲社、東京、2000年)

(026 - 022)

靈的進化

第1ステップとして、他の諸文化との接触を通じて、多くのアメリカ人はもはや彼ら自身の宗教的伝統が唯一の真の宗教だとは見なさず、すべての宗教は提供すべき何かを持ち、人間存在の靈的切望を満たすための正当な道だと信じる。。。

第2ステップは、靈性と宗教は同義ではなく、魂を養うための、宗教とは全く無関係の多くが道があることを覚ること。。。この段階で、何が自分の魂にとって最善かを教えてもらうために魂の救済・世話curan animanumを自分の個人的責任として(個人的靈性)。。。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p18、星雲社、東京、2000年)

(026 - 023) 宗教からの霊性の分離 - 霊性革命 -

西欧の二千年の歴史で初めて、霊性が伝統的宗教から独立し。。。

第1波：1960年代の人間の潜在性開発運動human potential movement。。創立者のアブラハム・マズローは、個人的霊性は、人の心理的成長または自己実現の主要な要素と見なした。。。

第2波：1980年代に、new-age movementはアメリカ全域に及んだ。何百万ものアメリカ人が、チャネリング・霊魂の再生・過去生セラピー・スピリチュアルヒーリング・ニューエイジミュージック・数珠・ピラミッド・水晶に興味をそそられた。

第3波：1990年代初め、魂へのムーブメント。主として宗教、またはブルースと結び付いていた魂soulという言葉は、靈感を与える物語りから親密な関係にまでのあらゆるものに。。。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳：スピリチュアル・レボリューション、p20、星雲社、東京、2000年)

(026 - 024)

ベビーブーマーたちの霊性

アメリカで1946年から1964年の間に生まれたこの世代は、推計7,580万と圧倒的に多く、人生の各段階を通過する都度、アメリカの文化を変えてゆく。

彼らは、現在、中年に達しつつある。青年期の霊性は霊spiritと関係があり、一方、中年期の霊性は魂soulと関係がある。。。霊は高さにかかわるものであり、魂は深さにかかわるものである。

human potential movementとnew-age movementは、主として霊の運動であった。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p23、星雲社、東京、2000年)

(026 - 025)

靈性についての個人的見解

1) 靈性は普遍的である。ある一つの宗教, ひとつの文化, または一つの集団に限られていない。2) 靈性は人間的現象である。人間存在の生得の自然な潜在能力。3) 靈性の共通の核心は, 内的, 現象学的レベルに見いだされる。靈性は無数の外的形態に現れるが, その下には, 聖なるものへの共通の切望, 生の神秘に触れ, それを讃えたいという普遍的願望がある。4) 靈性の本質的性格は神秘的であり, 靈性は魂に根ざしており, 聖なるものの体験によって培われる。5) 靈性に結びついた一定の神秘的エネルギーがある。魂は, この聖なるエネルギーによって養われると活発になり, 人の存在は熱情, 力, および深さを吹き込まれていく。6) 靈性の目的は同情である。靈的生活は心の優しさから生じ, 真正の靈性は他の人々への情愛がある行為を通じて現れる。

(Elkins, ND: Beyond Religion, 1998)

(大野純一訳: スピリチュアル・レボリューション、p45、星雲社、東京、2000年)

(026 - 026)

靈性の構成要素(1)

- 1) 超越的次元: - 靈的な人は、人生には超越的な次元があるという、経験に基づいた信念。。。目に見えるものが全てではないということ。。。。
- 2) 人生の意味と目的: 人生には意味と目的があるという本物の感覚で実存的真空をうずめた。。。。
- 3) 人生の使命: 靈的な人は使命感を持っており、超越へと動機づけられて。。。。
- 4) 生の神聖性: 靈的な人は、生は神聖さに浸されていると信じ、しばしば非宗教的な境遇で畏怖・畏敬及び驚きの感覚を経験。。。。
- 5) 靈的価値対物質的価値: 靈的な人は、究極の満足は物質的なものではなく、靈的なものに見いだされると知っている。

(Elkins, ND: Beyond Religion, 1998)

(大野純一訳: スピリチュアル・レボリューション、p47、星雲社、東京、2000年)

(026 - 027)

靈性の構成要素(2)

- 6) 利他主義: 靈的な人は、強い社会正義感を持ち、利他的な愛と行為に献身する。
- 7) 理想主義: 靈的な人は、世界の改善に献身する夢想家で、高い理想に傾倒し、人生のすべての面での肯定的潜在可能性の実現に献身する。
- 8) 悲劇的なものへの自覚: 靈的な人は、人間存在の悲劇的現実を厳粛に意識。。。人間の苦痛・苦悩・および死についての深い自覚は深さを与え。。。。
- 9) 靈性の報い: 靈的な人とは、その靈性が人生で、実を結んだ人である。

(Elkins, ND: Beyond Religion, 1998)

(大野純一訳: スピリチュアル・レボリューション、p47、星雲社、東京、2000年)

(026 - 028)

魂の定義

ギリシャ語で魂にあたる言葉はプシケpsyche, ラテン語ではアニマanimaである。英語の魂soul自体は, 息または生命力に関係があった古英語sawol, およびアングロサクソンのsawallに由来する。

魂は感じられ, 触れられ, そして知られることはできるが, 決して定義されることはできない。あらゆる概念的システムの網をすり抜け, あらゆる科学的探検の目を逃れる。魂を知るためには, 辞書や明示的定義の中にではなく, 美術館・詩の朗読・コンサート・舞台演技・シンボル・儀式・ドラマ・親密な関係・想像的性質によりふさわしい他の場所の中に探さなければならない。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998)

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p58、星雲社、東京、2000年)

(026 - 029) 宗教的ではあるが、靈的ではない

組織宗教の信徒たちは、彼らの信仰は元々、その預言者の恍惚的体験に基づいていたということをしばしば忘れる。その人々の宗教的傾倒は、もはや真正の靈性の基準によってではなく、その宗教の信条的立場に一致する度合いによって判断される。かくして、人が宗教的ではあるが、しかし靈的ではないことが可能になる。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p118、星雲社、東京、2000年)

(026 - 033) いかにして心理学はその魂を喪失したか

心理学psychologyという言葉は、ギリシャ語の魂psycheと学問logosから来ている。現代心理学は、発端から自然科学の仮説と方法によって浸透されてきた。心理学の初期の思想家たちは、しやにむに心理学が科学になることを欲して、自然科学の道をたどり、心理的現象は、しばしば、物理的現実の範疇に翻訳することができないということを了解し損なってきた。自然科学においては非常に有効な方法と統計的手順は、心理的現象に適用されるときは、しばしば無効で還元主義的である。われわれが岩を研究するとき、「主体」が「客体」を研究している。が、他の人間を研究するとき、「主体」がほかの「主体」を研究している。人間は自覚を持ち、そして自分たちの扱われ方に対して反応する。それゆえ、心理学的研究に固有の人間関係を無視することはできない。研究者は、中立性と科学的客観性の名において、対象から距離を置き、超然とすべく努めるかもしれないが、なお関係的メッセージを出している。

(Elkins, ND:Beyond Religion,1998

(大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p262、星雲社、東京、2000年)

(026 - 034)

科学主義は、狭隘な哲学的立場

伝統的な自然科学の方法は、物質的現象の研究においては精密で簡潔で有効であるが、その一方で、人間に関する諸事の研究においてはしばしば不適切で、無効で、還元主義的で、また有害である。人間を研究するためには他の方法 - 現象学的・民族誌学的・歴史的・文学的・物語的・理論的・解釈学的方法 - が、伝統的な科学的方法によって捉え、そして扱うことができない、微妙で精妙な人間的現象のための捕蝶網の役割を果たさなければならない。科学は知の探求である。他方、科学主義は自然科学の方法が全ての研究調査活動に用いられるべきであるとする、狭隘な哲学的立場である。

(Elkins, ND : Beyond Religion, 1998)

(大野純一訳: スピリチュアル・レボリューション、p264、星雲社、東京、2000年)

(026 - 037) サイコセラピー：魂を養い、癒す術

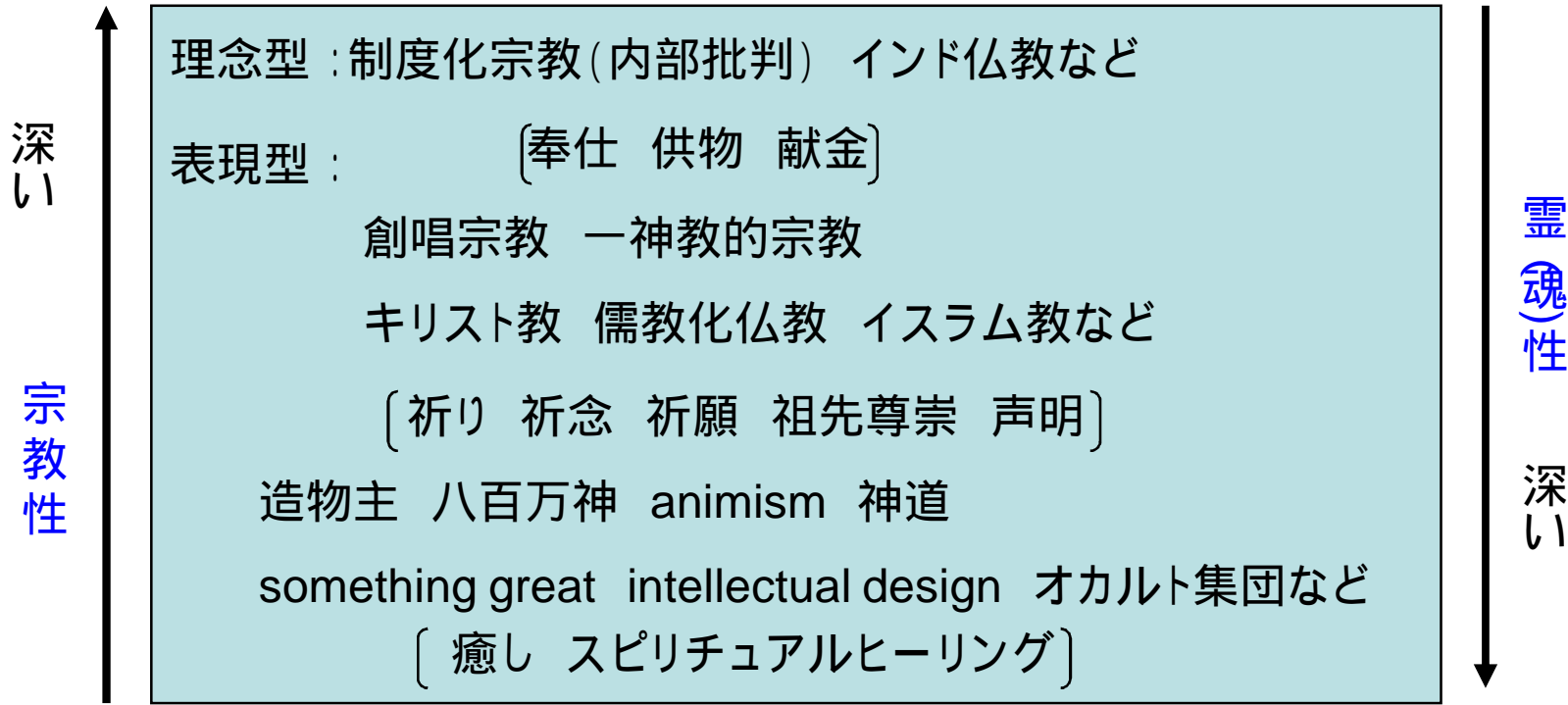
愛は、傷ついた魂の最も力強い癒し手である。治療的關係においては、愛は共感・配慮・温かさ・尊敬・誠意・およびクライアントの受容として現れる。

それは魂と魂との接触を可能にし、クライアントの魂を和らげ、養うがゆえに癒すのである。

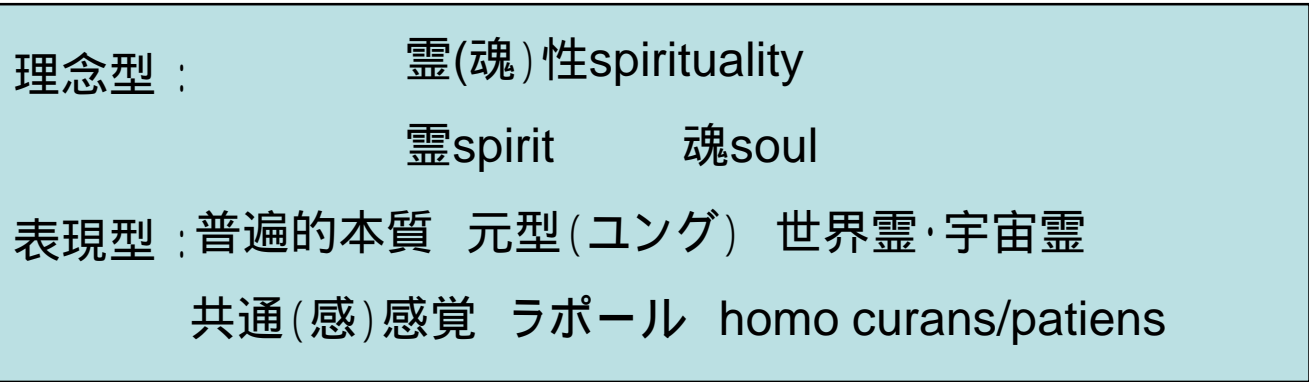
(Elkins, ND : Beyond Religion, 1998)

(大野純一訳：スピリチュアル・レボリューション、p296、星雲社、東京、2000年)

霊(魂)性・宗教性の概念モデル



インフラストラクチャー



Ref : 宗教は約束事・科学は先行的決定事項を追求しない(引力・脳の意識作用)